森林整備Ⅰ

森から里へ　～生物回廊づくり（理論と実習）

日時：平成２５年９月２９日（日）　１０：００～１５：００
講師：林　進（岐阜大学名誉教授・犬山里山学研究所理事長）

概況

『森から里へ　生物回廊づくり』（理論と実習）

「生物回廊」とは何でしょうか。回廊というと、①長く続く経路②何かを取り巻く経路③何かが行き来する経路④異なったものがつながりをもって続く経路　ということを連想します。つまり、生物回廊とは、生き物のネットワークを意味します。
例えば、一つ一つ互いに離れた緑地（孤立緑地）が存在していて、その間に「緑の回廊」を設けてやれば、互いに離れていた緑地がつながりあい、全体で一つの緑地帯となります。そうすると、孤立していた緑地内でしか生活していなかった生き物が広い範囲を行き来できるようになり、活動範囲が広がります。生物の中にはいろいろな場所を行き交って生活を営んでいる種が何種類も存在し、その生物達にとっては「生物回廊」は非常に重要なものであるということが言えます。

次に、生態系について。生態系はそのバランスを保ちながら存在し、その中で個体群が群集を形成しながらも、互いに棲み分けて生活しています。その関係は、競争関係であったり、共生関係であったりと様々です。生物の生き方はそれぞれで、違ったもの同士で群がって生活することで、自身の特性を活かしています。

個体群同士、生物同士は完全に孤立することなく、交わりをもって生きています。ここで「エコトーン」という言葉が出てくるのですが、その意味は「隣接する生物群集間の相互作用」で、別の表現をすれば「移行帯（結び目）」、「緩衝帯」といった言葉が挙げ

られ、何か互いに離れたものを結びつける、交わらせるといった意味合いで、これは「（生物）回廊」の意味と重なります。この「エコトーン」を無くしてしまうことで、生態系を大きく変えてしまうこともあるのです。

　このエコトーンの存在を知り、守るためには、実際にフィールドに出てどのような種がエコトーンの役割を担っているのか地形と植物層とを照らし合わせて「マップ」を作ってみることも大切なことです。